

# 保育效果に關する研究

山下俊郎

## 一 問題の所在

幼児教育に於ける保育效果に關する研究は二様の意義を持つてゐる。その一は保育效果に對する保育者の反省の意味に於てであり、その二は保育者以外の一般人に對し、保育の効果を認識せしめる意義に於てである。第一の方面は小學校以上の學校に於てはいわゆる「評價の問題」として新教育に於ける重要な問題として取り上げられてゐる問題であるが、幼児教育の部面に於ては未だそれ程とり上げられてゐないやうである。第二の方面は、幼児保育機關の普及からひいては義務制の問題に對する理論的及び實際的根據として重要な意味を持つてゐる。このような重要な意義を持つ保育效果の研究に就いて、従來、内外に於て行われて來た諸研究を綜覽して問題の所在を明かにしたいと思ふ。

従來の保育效果に關する研究は、一、知能の發達に及ぼす保育の影響、二、知識の發達に及ぼす保育の影響、三、性格の發達に及ぼす保育の影響の三方面に分けて考へることが出来る。これを順次に検討して見る事にしたいと思ふ。

## 二 知能の發達に及ぼす保育の影響

一般に知能の發達を規定する條件として素質的な條件と環境的な條件とのいずれが大きいか、またいずれがどの程度の影響力を持つてゐるかといふことは、いわゆる *Nature vs. Nurture Problem* として、古くからアメリカで論議された所であるが、この問題の中に、環境的條件としての幼時に於ける保育機關の意義を検討する一連の研究がある、ナースリースクール及び幼稚園へ通ふということが、幼児の知能の發達に對して積極的影響を有するかどうかといふことが、多くの研究者によつて検討されてゐるのである。このような研究の最初のものは一九二五年ウーリーによつて發表されたものであるが、ナースリースクールで教育を受けることは幼児の知能の發達に對して多少の促進的效果を持つてゐるといふ結論を得てゐる。この後一九二八年にヒルドレスによつて、最低四ヵ月以上ナースリースクールもしくは幼稚園の教育を受けた幼児は知能指數の平均に於て六だけ進んでゐるといふ結

果が發表されている。この後、グッドナウ、バレット及コッホ  
ウエルマン、アイオワ大學兒童研究所、スタークウエザー及  
ロバーツ、フランゼン及バーロウ、ジョーンズ等の研究がこ  
の問題に就いてなされているが、この結論は必ずしも一樣で  
はない。大部分の研究に於ては、知能指數によつて測定され  
る知能の發達に於て、幼兒保育機關に於て保育を受けた幼兒  
の方が優れているという結果を見出しているが、グッドナウ  
やフランゼンの研究に於ては統計的に見て有意義な差異は認  
められないという結論を出している。従つて、すべての研究  
の結論が一致しているということは言い得ないではある  
が、大部分の研究の結果に従えば知能の發達に對して幼兒保  
育は促進的效果を持つていと結論してもいゝであらう。我  
が國に於ける桐原博士の研究の結果はこれを逸つた角度から  
證明している。即ち、倉敷全市の小學校新入兒童に就いて知  
能検査を行つた結果について、幼兒保育を受けない兒童に於  
ては、社會的中流以上の階級の兒童の知能は全體的に下層階  
級の兒童の知能よりも高いのであるが、幼兒保育を受けた兒  
童に於ては、全體的に知能の發達が著しく、しかも、中流以  
上の階級と下層階級との兩階級の兒童の知能の發達の差異が  
殆んど認められない程の促進的效果を持つ事が明かにされて  
いるのである。私共が愛育研究所に於て昭和十六年乃至十八  
年に互つて研究した結果に於ても、同様の結果が見出されて  
ゐる。

以上を以て見れば、幼兒保育機關は幼兒の知能の發達に對

して明かに促進的影響を持つていと結論して誤りがないと  
言えるであらう。

### 三 知識の發達に對する

#### 幼兒保育の影響

次に知識の方面の發達に對する幼兒保育の影響を見よう。  
これは主として、小學校新入學兒童に於ける色々の知識の發  
達を、幼兒保育を受けた兒童とそうでない兒童とに就いて比  
較することによつて確かめられる。

文字の知識に關する調査は青木誠四郎、二宮綾子兩氏の研  
究の中に含まれているが、比較的新しい資料たる愛育研究所  
に於て我々の研究した結果に就いて見ることとする。讀字力  
に於ては片假名四十八字を全部讀み得る兒童は保育を受けた  
兒童（以下保育兒という、これに對して保育を受けた兒童を  
非保育兒と呼ぶ。）に於ては四三%に上るが、非保育兒に於て  
は一八%に留まる。また書字力に於て、保育兒では假名を全  
然書けないものは六%に過ぎないが、非保育兒に於ては二一  
%に上り、その反面、四十一字以上書けるものは保育兒に於  
て二〇%であるのに對して、非保育兒に於ては僅か一〇%に  
留まつている。姓名の書字力に於ても、保育兒は七八%が正  
しく書けるのに、非保育兒に於て正しく書けるものは四八%  
に過ぎない。

次に數觀念の發達に就いても、同様青木、二宮兩氏の調査

の結果もあるが、我々の研究の結果に就いて言えば數詞を唱える事、計數、一定數を拾ひ出すこと、數を合せること等に於て保育兒は非保育兒に對して、やや優れているに止まるが、計算能力に於ては相當に著しい差異が生じている。例えば十以下の簡單な加算に於て保育兒童は平均八五・五%出來るのに非保育兒は七九%しか出來ない。減算に於ては、保育兒は六七%の正答率を示すのに對して、非保育兒は五四%の正答率を示すに過ぎないのである。

次に言語の發達に於て保育兒はまた優れている。青木、二宮兩氏の研究に於てはいわゆる指名テストによつて語彙を調べているが、保育兒の語彙の方が豊かであることが示されている。我々の研究に於ては、愛育研究所の語彙検査を用いて調べたのであるが、語彙の發達偏差値に於て、五〇以上のもの（これは一般の平均以上ということを意味する）が、保育兒に於ては六六%に及ぶのに對して、非保育兒に於ては五二%に過ぎないという結果を示している。次に同じく我々の研究の結果によれば、十二の色を見せてその色名を言わせる色名テストを行つた所、一〇以上の色の名を言い得た兒童は保育兒に於ては八四%に及んでゐるが、非保育兒に於てはわずかに二八%に過ぎないという状態である。

以上の文字、數、語彙の知識的發達を見れば、保育兒に於ける保育の効果は極めて顯著なものであることが證明されてゐるのである。

#### 四 性格の發達に對する 幼兒保育の影響

保育兒と非保育兒との差異に關して保育効果が問題とされる場合に一番問題になるのは性格の發達に對する幼兒保育の影響である。しかし、この點に就いては、一般社會に於て問題とされる一般的論議は非常に多いが、經驗的研究的資料は至つて乏しい。

青木、二宮兩氏は、實際的方法によつて、作業態度と注意の持続性に就いて研究を行つてゐる。先ず作業に就いて極めて單調な原稿用紙の樹の中に斜線を引くという作業を五分間行わしめて見ると、保育兒は作業の速度に於ては優るが、作業の質に於ては劣つてゐるといふ結果が出て來てゐる。またきちんと靜座してゐるといふ課題を課して見ると、七分間に姿勢を崩して動く態度は、保育兒に於て平均四・四回であるが、非保育兒に於ては三・八回であつて、保育兒の方が、動きが多く、注意の集中持續が困難であるといふ結果を示してゐる。

次に我々が、小學校新入兒童に對して、受持教師の評定による評定法によつて調査した結果によれば、保育兒は、規律、社交性、協同性、落ちつき、注意力、作業態度、自立性、清潔の習慣に於て優れて居り、敬虔、従順、素直、謙遜、我が儘、言葉遣ひ、忍耐の諸點に於て非保育兒に比べて劣つてゐる。

る。また日常生活の習慣に就いての質問書による調査の結果に就いて見れば、歯磨、着衣、挨拶、食前の手洗い、就寝時間の規則性に於て保育児が優れて居り、偏食、洗顔、大便の習慣、夜尿癖に於て非保育児との間にさ程の差異が認められないという結果を示している。

性格的特性に就いての調査はかつて東京市保育會に於てなされたものがあるが、今その資料を手許に持たないので觸れることが出来ない。

以上の性格的發達に就いては、一面に於て知能及び知識の發達に於ける程、量的に表示する事が困難であることも關係して、未だ充分に研究されたものが少ないと言つていゝであらう。

## 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五

以上、従來の保育效果に關する諸研究を概観して見ると、知能及び知識の發達に對しては促進的影響の存在が或る程度まで確かめられているが、性格的發達に對しては研究が至つて少ないという事を認めなければならぬ。そして、従來の諸研究に就いても、研究方法上の問題に残されたものが極めて多く、全體として言うならば保育效果の研究は、未だ充分に組織されていないと言つていゝであらう。しかも、今日程幼児保育の重要性が叫ばれる時期はないのであるが、一面に於て我が國のいままでの教育のすべてがさうで、つたように、幼児教育もまた科學的根據の獲得という點に於て必ずし

も充分でなかつたことを我々は反省しなければならぬ。將來幼児教育の前進の爲に、我々はその科學的基礎づけに努力を拂わなければならないが、保育效果に關する研究はその中で重要な意見を持つものであることを我々は認識すべきである。

此の稿は昨年十一月の第一回日本保育學會で發表される豫定であつたものゝ梗概である。時間の都合上取り止められたので特に乞うて本誌に掲げる。

### (三一頁より)

見たいもので、ただその遊びの始まるキッカケが他の子供の存在という所に在るだけだというような、この種の遊びをいうのである。いわば、社會的な遊びの最も原始的な形のものが二歳児に於て、ようやく始まりかけて來て居るといふ所なのである。このようにして、二歳児の子供同志の社會生活というものは、まだ本格的な社會生活の入口の所に在るといふことが出來よう。

### 5 二歳児の發達的特質

二歳児の主な精神生活の部面に就いて一通り述べて來たが、最初に述べた走りまわる子供という表現に含まれているように、或る程度の基礎が出來て、これがまさに開こうとする状態、開きかけた状態というのが、二歳児の大きな特質と言へるようである。